



TITLE:

自由22 野生ニホンザルのコドモの
採食行動(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

橋本, 千絵

CITATION:

橋本, 千絵. 自由22 野生ニホンザルのコドモの採食行動(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1991, 21: 85-85

ISSUE DATE:

1991-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164212>

RIGHT:

ち合わせる(3:9)。坐位で打ち合わせる(4:2)。しかし、定位操作時に他者へ視線を送るなどの交流活動の頻度はヒトに比べて少なかった。今回の条件下で積木積み行動は観察できなかった。

自由21:

ニホンザルの採食行動・個体差をもたらす要因についての研究

齊藤千映美(東京大)

霊長類一般に、個体間の敵対的交渉は採食中に多く、とりわけサルがより好んで採食する食物をめぐる起きやすいと言われる。一方、ニホンザルの非許容的個体間距離が約1mであることから、採食パッチが混み合ってくればそれだけ敵対的交渉も起きやすくなると予想される。本研究ではこれらのことをふまえた上で、サルの好み(preference)を単位重量当りのエネルギー含有量で置きかえて敵対的交渉の生起頻度を説明できるかどうか検討した。

調査対象は宮城県金華山島の落葉林帯に生息する野生ニホンザルB2群である。1989~91年の冬期・春期に行われたオトナメス6頭の個体追跡から得たデータを分析し、春期の食物11品目について栄養分析を行った。秋期・冬期の食物の栄養含有量についてはNakagawa(1989, 90)の結果を用いた。

観察時間の長かった4品目(ケヤキ種子、イヌシデ種子、ブナ花芽、カエデ新葉)の採食行動を比較すると、①どの食物でも、伴食個体の密度が高くなるにつれ敵対的交渉が起きやすくなり、②可食部の単位重量当りのエネルギー含有量が多い程敵対的交渉の頻度が上がる、ことが確かめられた。

春期の食物の大部分は落葉樹の新葉である。葉の生産量は花や果実・種子と比較して多く、採食パッチの伴食個体密度が低い。従って、果実食の多い秋期に比較すると食物のカロリー価は春期にはやや低く、かつ個体間の競合も緩和されていると考えられる。

自由22:

野生ニホンザルのコドモの採食行動

橋本千絵(京都大・霊長研)

宮城県金華山島のニホンザル野生群を対象に、オトナとコドモの採食行動の違いを調べた。前回(1989年度)の結果では、オトナよりコドモの方が採食効率の悪い食物があり、その結果コドモはエネルギー必要量から予想されるよりも長く採食時間に当てていると考えられた。

調査時期の主要食物品目のひとつカヤの種子を採食する際、種子を拾った後採食せずに捨ててしまうことがときどき観察された。拾った種子の総数に対する捨てた種子の割合は、2オメスが一番多く、ついで4オメス、オトナメスの順で少なくなっていた(t検定, $p < 0.001$)。

次にカヤ種子の捨てた割合の時期的変化と採食場所の質の時期的変化の関係をみた。カヤの採食場所の質の高い時期つまりカヤがふんだんにある時期には、オトナに比べコドモは高い割合で種子を捨てていた。カヤの採食場所としての質は新しい採食場所を次々と訪れることによってしばらく一定に保たれるが、採食場所を開拓し尽くしたときに採食場所の質は劇的に低下する(Nakagawa, 1989)。この採食場所の質の劇的な低下に対してオトナが種子を捨てる割合は変化がみられないが、コドモが種子を捨てる割合はオトナと同程度まで減少した。

このように、オトナは常に採食効率のよい方法を選択するが、採食場所の質のよい時期にみられたように、コドモは採食効率が多少悪くなくてもよいものを選んで採食することがあり、このことが採食時間がエネルギー必要量から予想されるよりも多くなる理由のひとつと考えられた。

自由23:

ニホンザルの採食テクニック

上原重男(札幌大・教養)

ニホンザルの野外研究のごく初期に、採食テクニックに地域差のあることが指摘された。これは「文化」の問題として注目されたが、その後系統的に研究されることなく、今日まで放置されたままである。

1990年10月に、金華山島に生息する野生ニホンザルを対象として、植物性食物の採食時に使われるテクニックをリストアップし、具体的な採食動作について、地域間比較を念頭においた記載の標準化をめざした。1990年はブナの果実が豊作で、